

2015年度 サバティカルの報告

北島健一（コミュニティ政策学科教員）

一年間の研究休暇を無事に過ごし、この四月に大学の通常職務に戻りました。復帰早々に休暇気分も抜け、前期は慌ただしく過ぎた感じです。小さな所帯の学部・学科だけに一人抜けるだけでもそのしわ寄せがあちこちに及びます。退職までに数年を残すこの時期に貴重な休暇をいただいたことに大学ならびに学部スタッフに感謝する次第です。

休暇に入る前から二つのことを計画していました。おかげさまで当初に予定していたことの最低限のラインはクリアできたように思います。元来、不器用なものですから、いずれも一定のまとまった時間的余裕がないとできないものと先延ばしにしてきたことです。

一つは、日本の農村部で80年代頃から活発になってきた集落の住民（70年代頃から兼業農家が増え、80年代からは非農家も増えてきます）による経済活動あるいは地域づくりの取り組みについての調査研究です。

いわゆる農村女性起業については以前から注目し、私の担当科目「コミュニティビジネス」においても農村部の事例として継続的に取りあげてきました。今日の日本の農村部には、従来からの過疎化に加えて、著しい高齢化、米価格の低落、耕作放棄による農地の荒廃、兼業化・混住化による集落機能の低下、農協支所や商店の撤退による日常生活の不便さの増大、平成の大合併による行政サービスの低下などのさまざまな困難が山積しています。それらを背景にして現代日本の農村部には、自治体の支援もあり、女性起業以外にも自分たちの暮らしを守るためのさまざまな自律的な協同の取り組みが躍動しています。具体的には、集落営農と呼ばれる農業部門の生産協同組合の登場、閉鎖された商店の地域住民による引き継ぎ、新しい地域自治組織の結成とそれによる経済的な取り組みなどです。「地方消滅」は一部の「部外者」たちの想像にしか過ぎません。

私の前任校の所在地四国には内子町（愛媛県南予）、馬路村（高知県）、上勝町（徳島県）などの全国的にも有名な地域づくり（農村部）の事例があります。私が本校に赴任したのは6、7年前のことになりますが、それ以降、こうした農村部の取り組みを身近に感じる機会はほぼ無くなり、私の研究関心も農村部の社会的企業・コミュニティビジネスから都市部のそれへと移っていきます。しかし、

その一方で、欧州の研究者と交流するたびに、日本のこの実践分野の特徴は、就労機会の創出や社会サービスの提供の領域よりも、コミュニティ開発や地域発展とよばれる領域の新しいイニシアチブにあるのではないかとの思いも強くなっていきました。その思いが確信に変わり、ちょうど東アジア四カ国の共同研究も始まったこともあり、サバティカルの前年度に科研を申請することになります。申請は運良く採択され、サバティカルで時間的な余裕が十分になれば、初年度から曲がりなりにも調査研究を軌道に乗せることは難しかったように思います。

なお、サバティカル中に、営農集落に関するペーパーをヘルシンキで開かれた社会的企業に関する研究大会（6月30日－7月3日）とリスボンで開かれた国際公共経済学会（7月15日－18日）で報告する機会に恵まれました。それはとてもいい経験となりましたが、ただ、拙い英語発表に加えて、英文の中に日本語でのローマ字表記が多くなってしまい、外国の研究者には取っ付きにくい内容になってしまったのではと大いに反省しています。

サバティカル中に取り組みたいと考えていたもう一つのことは、理論的な研究を深めることです。かれこれもう二十年近くになるでしょうか、私はサードセクターに関する研究の中では「連帯経済」という議論に関心を持ってきました。それは、もともと社会学畑のフランス人研究者たちが一方の実体レベルでの展開ともう一方の社会理論や思想史との間を行き来して組み立ててきた議論です。フランスの近年の政策動向や社会思想史に精通しているわけでもなく、まして経済学を専攻してきた私にはとても難しい議論でした。まずは就労支援企業などの実態レベルでの展開に沿った分析を対象にしてこの議論の意義などを検討することから始めました。しかし、この議論の理論的な核心をつかめないままにずっときてしまったところがあります。

転機は数年前に翻訳本を出版した頃に訪れます。余談ですが、この翻訳には相当苦労しました。著者がどこか別のところに書いているもっと長い文章を縮約し丸めて書いた文が原本には散見され、そのような箇所は原本だけでは意味不明な場合が多いので、その元の長い文を探し当てるのに大変な労力を要したのです。翻訳本に過ぎないのですが、後にベルギー人の友人からはとても大きな貢献だと言われ、努力が報われた気がしてとても嬉しいことでした。

それはさておき、私にとってはこの作業は連帯経済論の全体像を総括的に理解する上で大きな意味をもっています。とりわけ、出版をきっかけに本学の招聘制度を使って数年ほど前に著者を招き、その折りに交わした議論を通して自分なりにその理論的な核心部分もようやくつかめるようにもなりました。いろいろな言い方が可能ですが、「市場モデルは社会関係の一般モデルとなった。連帯経済は、互酬性の原理を前面に打ち出し、おそらく経済の再埋め込みにむけた歩みのもつ

とも一貫性のある取り組みである」(Guy Roustang)との言い回しはその本質的な部分を言い表しているように思います。

ところが理解が深まるのと並行して、この議論の不十分な箇所や曖昧な箇所、フランス固有の特徴にも気付き始めます。また、何よりも南米の民衆経済の議論を含め、「連帯経済」を語る論者が増えてきていることも気になり始めます。サバティカルは、このようなこれまで留保してきた点に取り組み、連帯経済の議論のその後の展開ないし深化をまとめる絶好の機会となりました。現在は、この作業をベースにして、日本の農村部に現れつつあるダイナミックな住民イニシアチブの活動を分析するための理論的なフレームワークを検討しているところです。

サバティカルというまとまった研究時間を確保できたことで、これからの数年間における研究の方向性も固まったように思います。定年まであと4年ほどで長くはないですが、今後の研究教育にその成果を活かしていけるように、引き続き精進していきたいと思います。